

医師研修プログラム

2018年5月 出田眼科病院

1. レジデント
2. フェロー
3. 常勤医師

【研修プログラムについて】

本プログラムは、眼科臨床医として必要な知識、臨床技術を習得することを目標としています。

当院の医師構成は以下の通りです。本研修プログラムでは、研修のレベルとして下記1の①～②の段階を設け、一般眼科医研修を目標とする医師の研修目標を定めています。また2として、眼科専門医取得後さらに専門性の高い領域の研修を望む医師のためのフェロー研修が可能です。経験を積んだ常勤医も、生涯学習としても、3の研修が求められています。

1. レジデント：卒後3～6年
 - ① ジュニアレジデント：卒後3～4年（大学での研修1年を含む）
 - ② シニアレジデント：卒後5～6年
2. フェロー：眼科専門医取得者、2年間
3. 常勤医師：フェロー終了者

上記は一般原則であり、個人の研修レベルによって変わり得ます。なお他施設で研修してきた医師や大学からの派遣の医師も、卒後年次及び経験によって以上のいずれかに編入可能です。

また、当院では理念として“誠の心”を掲げており、技術と同等に人間性を重視しています。具体的には、①患者さんの心身の治療に専心する、②専門知識の研鑽と人格形成に努める、③社会の変化に柔軟に対応し、地域に貢献することを目標としています。採用時や次の段階へのステップアップ時には、当院の医師としての適正も考慮されます。

【各研修プログラムの概要など】

1. レジデント

(ア)研修対象者、期間

レジデントは初期臨床研修の2年間を終了した卒後3～6年目の医師を対象とします。4年間の期間をジュニアレジデント（卒後3～4年）、シニアレジデント（卒後5～6年）の2つの期間に分けます。眼科専門医制度で義務化されている1年間の大学での研修は、ジュニアレジデント2年目（卒後4年目）を原則としますが、各人と相談して決定します。

(イ)研修目標

一般眼科臨床を研修する事を目標とします。一般眼科医として眼科領域の疾患の診断、治療に責任をもって対処できるための知識と技術を獲得します。研修終了時には眼科専門医として試験に合格し、自立できるように、日本眼科学会専門医制度「眼科研修医ガイドライン」及びアメリカの研修のマニュアルである「The Wills Eye Manual」に則ってすすめていきます。なお、当院は日眼専門医制度認定施設となっており（認定第4021号）、日本眼科学会指導医2名（出田隆一、出田秀尚）が在籍しています。

(A)前半の2年間はジュニアレジデントと称し、眼科検査及び治療技術の理解と習得に努めます。ジュニアレジデント1年目はフェローやシニアレジデントについて眼科診療の基礎

知識と技術の習得を目標とします。また、指導医と共に外来及び入院患者を受け持ち、患者や家族との関わり方、チーム医療の実践などを学習します。光凝固治療や外眼部手術の執刀を行い、また内眼手術の基本的な手技や手術理論を学習し、手術助手を行い、白内障手術の研修も開始します。また、症例検討会や医局会に参加し、研究発表や論文作成なども指導医のもとで行います。ジュニアレジデント2年目は眼科専門医制度で義務化されている1年間の大学での研修を原則とします。研修は当院と関連のある大学で行いますが、各人の希望によりその他の大学でも可能です。また、ジュニアレジデント1年目に大学での研修を希望される場合も相談に応じます。ジュニアレジデント終了時に指導医の研修評価を受け、後半のシニアレジデントの研修期間の方針を決定します。

(B) 後半の2年間はシニアレジデントと称し、診療技術のさらなる向上及び専門的技量の習得を目指します。また、白内障手術などの内眼手術の研修を本格的に行い、研究発表や論文作成などもさらに進めていきます。

(A) (B) の期間を通じて、医の倫理、医療に関する法律を学びます。

2. フェロー

(ア) 研修対象者、期間

当院でレジデント研修を終了し眼科専門医を取得した者、または他施設で研修し眼科専門医を取得した者を対象とし、研修期間は2年間とします。必要に応じ延長も可能です。

(イ) 研修目標

当院の専門領域である網膜・硝子体疾患を研修する事を目的とする網膜・硝子体フェロー、緑内障フェロー及び角結膜フェローを設けていますが、すべての分野の研修が可能です。

(A) 網膜・硝子体フェローの研修では2年間の研修で

- ・ 内科外科網膜疾患の診断学
- ・ 網膜剥離に関連する光凝固および冷凍凝固などの非観血手術
- ・ 強膜バックルなどの強膜手術
- ・ 種々の疾患に対する硝子体手術

の習得を目標とします。また、難易度の高い白内障手術には硝子体手術の技術が必要となる場合が多いので、これについても研修を通じてレベルアップが可能です。

責任医師：出田隆一（院長）、出田秀尚（名誉院長）、川崎勉（副院長）、
出田真二（呉服町診療所院長（以下 分院院長という））

(B) 緑内障フェロー

- ・ 各種緑内障の診断学
- ・ 各種緑内障手術の理論と実際

責任医師：風間成泰（非常勤）

(C) 眼形成フェロー

- ・ 疾患の診断学
- ・ 疾患の治療理論と実際

責任医師：出田真二（分院院長）

(ウ)手術目標の基準

白内障手術ランク

- C：執刀する場合に指導者を必要とする。
- B：手術中のトラブルに対しては、応援を必要とする。
- A：手術中のトラブルに対し自ら対処できる。

網膜剥離手術ランク

- D：眼底・硝子体のスケッチを的確に行える。
- C：網膜冷凍凝固術が行える。
- B：位置決めや排液などを行える。
- A：強膜切開が行える。

硝子体手術ランク（初心者） 術者になるには白内障手術ランク B 以上が必要

- D：眼底・硝子体のスケッチを正確に行える。
- C：単純な硝子体切除術が行える。
- B：黄斑円孔や黄斑浮腫など黄斑疾患の硝子体手術が行える。
- A：癒着のある硝子体手術が行える。

◎フェロー終了医師

- フェロー終了時のそれぞれの手術ランクを評価する。
- ランク A に達していない場合は、ランク A に達するよう引き続き努力する。
- ランク A に達したものは、次なる目標を院長らスタッフと相談する。
- さらに網膜硝子体手術を研修する場合は、以下の網膜硝子体上級ランクを参考にする。
 - ・ 網膜剥離の硝子体手術が行える。
 - ・ 増殖糖尿病網膜症や PVR の硝子体手術を行える。
 - ・ バックルを一人で行える。
 - ・ 再手術のバックルが行える。
 - ・ 再手術の硝子体手術が行える

3. 常勤医師

(ア)対象者

当院でのフェロー研修を終了した者で、研修後当院での勤務を希望する者。

※ 他医療機関で研修終了し、当院で一般診療をする者も常勤医師ではありますが、この研修プログラムからは外れます。

(イ)目標

当院の専門領域である網膜・硝子体疾患や緑内障の診療の実践を通してさらに技量を磨きながら就業する事を目標とします。また、希望に応じてさらに別の領域の研修を行う事も可能です。

【身分・待遇】

- レジデント以上の医師の給与は当院の定める給与基準に依ります。当院ではコンピテンシーを考慮した成果主義による給与制度を導入しています。努力し成果をあげる医師は優遇されます。
- 住居はレジデント以上の医師に対しては、当院の規定に依る住居手当があります。

【研修評価】

1. レジデント

研修は日本眼科学会専門医制度の「眼科研修医ガイドライン」及びアメリカの研修のマニュアルである「The Wills Eye Manual」の項目に準じて行います。1年に1度研修の進行状況を評価してフィードバックを行い、次の1年間の研修方針を決めていきます。

2年間のジュニアレジデント終了時に人間性と技術面を評価し、さらに2年間シニアレジデントとして研修するか、研修の希望などを相談します。

2. フェロー以上

人間性と技術面を別紙の如き基準で院長らスタッフが評価します。人間性は技術面と共に重要であるので、人間性の評価を定められた項目に従って行ないます。技術面では別紙の白内障ランク、網膜硝子体ランク、緑内障ランクで別に定められた評価をして、ランクアップの認定を行います。

【研修終了後の進路】

1. レジデント

ジュニアレジデント終了時をひとつの区切りとしますが、引き続きシニアレジデントとして研修が可能です。ジュニアレジデント終了時に他施設での研修を希望する場合は相談に応じます。シニアレジデント終了者は専門医試験を受験し、一般眼科医として一人前となります。その後は、①網膜硝子体疾患の研修を行うフェローに進む、②緑内障の研修を行うフェローに進む、③角結膜の研修を行うフェローに進む、④一般眼科医として当院に勤務、⑤他施設に勤務し更に自分の目指す分野に進むなど様々な可能性が考えられ、相談に応じます。

2. フェロー

フェロー研修を終了した者は適正と認められれば、当院で常勤医としてさらに症例を経験し、研鑽をつむ事も可能です。また、他施設や派遣元の大学などでの勤務なども考えられます。希望を相談して決定します。

【指導スタッフ】

出田隆一（院長）、出田秀尚（名誉院長）、川崎勉（副院長）、
永田智（診療部長）、出田真二（分院院長）、林メリージェーン（麻酔科長）

【専門外来】

当院では専門領域である網膜硝子体疾患、緑内障、角結膜疾患の他に、以下の分野で専門の一流の医師を招聘し、専門外来・手術を担当して頂いております。従って全眼科領域の研修としても、高レベルの診療に触れることができます。現在もかなり高レベルですが、今後も充実を図る予定です。

網膜遺伝性疾患	三宅養三（名古屋大学名誉教授、愛知医科大学理事長）
黄斑	永井由巳（関西医科大学眼科学教室准教授） 吉田ゆみ子（お花茶屋眼科副院長）
緑内障	相原一（東京大学医学部眼科学教室教授） 今野伸介（杉浦眼科本院副院長） 風間成泰（新城眼科医院理事長） 豊川紀子（永田眼科副院長）
ぶどう膜炎	蕪城俊克（東京大学医学部眼科学教室准教授）
角膜	天野史郎（井上眼科病院副院長） 白井智彦（国際医療福祉大学医学部眼科主任教授）
斜視弱視、神経眼科	三村治（兵庫医科大学神経眼科治療学講座特任教授） 増田明子（西宮回生病院眼科部長）
白内障	徳田芳浩（井上眼科病院副院長）

【施設概況など】

◆ 標榜診療科

眼科、麻酔科

◆ 施設認定状況

- ・ 日本医療機能評価機構認定病院
- ・ 日本眼科学会専門医制度による研修施設
- ・ 公害保険取扱病院
- ・ 原爆被害者一般疾病医療取扱病院
- ・ 特定疾患医療取扱病院
- ・ 母子医療取扱病院
- ・ 自立支援医療指定病院
- ・ 労災保険指定病院
- ・ 身体障害者福祉法指定病院
- ・ 結核指定医病院
- ・ 生活保護法指定病院
- ・ 小児慢性特定疾患治療研究事業委託病院

◆ 医師数

常勤：9名、非常勤：5名（2017年9月現在）

◆ 病床数

一般病棟：本院 32床、分院 19床

◆ 研修環境、医療機器、設備等

医学図書・雑誌の整備状況：大学病院並みまたはそれ以上に充実しています。

文献データベース整備状況：医局から検索可能です。

学会活動費、雑誌投稿費等：院内規定（学会等入会費および年会費規定）により支給します。

◆ 主たる治療設備・治療機器

検査器機：視力測定装置、眼圧測定装置、コントラスト感度テスター、屈折検査装置、アコモドピリレコーダー、ヘスチャート、シノプトフォア（大型弱視鏡）、色覚検査表、視野測定装置（ゴールドマン、ハンフリー、FDT）、角膜トポグラフィー、スペキュラーマイクロスコープ、レーザーフレアセルメーター、眼底カメラ、眼底造影検査（FA、IA）、電気生理学的検査（ERG、EOG）、眼軸長測定装置（IOLマスター、超音波Aモード）超音波画像診断装置、HD-OCT、多局所網膜電図ベリス、立体視検査（TST、Lang）

手術器機：超音波水晶体乳化吸引装置（レガシー、インフィニティー）、硝子体手術装置（アキュラス）、内視鏡装置、手術用顕微鏡（ツァイス、MOD、CS、Visu160、Lumera T、広角観察システム RESIGHT、スリット照明システム VISULUX）、眼内照明装置（PHOTON II・ブライトスター）、電気凝固装置（ジアテルミー）、冷凍凝固装置、眼内レーザー、グリーンレーザー、ダイレーザー、YAG レーザー、半導体レーザー、PDT（光線力学的療法）レーザー、TTT レーザー、PASCAL レーザー、全身麻酔装置、電動式骨手術器械

※研修ご希望の方へ

研修のご希望は随時受け付けております。電話またはEメールにてご連絡の上、履歴書、臨床研修期間の業績、学会発表・論文作成があればその資料をお送り下さい。
選考は書類審査及び面接にて行います。

【お問合せ先】

出田眼科病院 〒860-0027 熊本市中央区西唐人町 39
電話：096-325-5222 Fax：096-311-5512
E-mail：info@ideta.or.jp 担当：高本昌彦